

第Ⅱ部門

道頓堀川に対して人々が求める「非日常性」に関する一調査

大阪市立大学工学部 学生員 ○魚住 健治

大阪市立大学大学院工学研究科 正会員 内田 敬

大阪市立大学大学院工学研究科 フェロー 角野 昇八

1. 緒論

近年の水辺整備事業において、人々の感性に訴えかけるような整備が重要視されるようになってきている。しかしながらその具体的整備手法は十分に明らかにされたとはいえない現状にある。本研究では、感性に訴えかける魅力とは、場の持つ“非日常性”（日常では感じるものの出来ない心地よいひととき）に集約されることの基本的立脚点に立ち、平成16年12月に遊歩道が完成した道頓堀川を対象にして、人々がそこに求める非日常の姿を明らかにするために行ったアンケート調査の結果を報告する。

2. 研究の手順

「非日常」の定義としては、嶋根らによる「連続する時間に対抗することによって生じる有意な瞬間」¹⁾がある。本研究においてもこの定義を基本とするが、心地よいもののみを「正」の非日常として対象にした。その上で、まず、大阪市内にある種々の水辺空間に赴いて、水辺空間を構成する様々な要素のうち、正の非日常を与える要因となり得るものについての評価と調査を行った。この調査結果を受けて、本調査の対象の道頓堀川沿川における景観、商業施設、遊歩道、および文化・歴史性などの水辺空間要素において、非日常を与える要因（以下、「刺激要素」と称す）をキーワードにして、遊歩道にいる人を対象にアンケート調査を行った。調査は、5段階形式にて全体の満足度（1題）および、道頓堀川を構成する各刺激要素に対する魅力度（15題）を問い、得られた回答者属性や評価結果を用いて、全体の満足度の評価得点を被説明変数、各刺激要素に対する評価得点を説明変数にして重回帰分析を行うことによる。

3. アンケート調査概要

道頓堀川遊歩道においてアンケート調査を実施した。調査方法の概要を表-1に示す。なお昼と夜では道頓堀川の様相が大きく異なるため、刺激要素の魅力度

評価では昼夜共通の質問14題に加え、昼夜それぞれ1題ずつ専用の質問を作成し、昼と夜の2部構成で調査を行うこととした。

表-1 調査方法概要

項目	調査概要
調査対象区	大阪市中央区道頓堀
調査対象地区	戎橋～太佐衛門橋～相合橋までの区間の遊歩道
調査対象者	遊歩道にいる人
調査期間	2008年12月～2009年1月
	昼と夜の2部
有効票数	昼n=175 夜n=152

4. 調査結果

4.1. 刺激要素に対する魅力度評価

表-2は、刺激要素に対する魅力度の5段階評価（+2, +1, 0, -1, -2）のアンケート結果の平均得点を示したものである。ここで、「水の存在感」などの「非日常性要因」は、アンケートで実際に問うた刺激要素に関するキーワードをいくつか統合して示した。

表より、昼の道頓堀川では、「⑥遊歩道の飲食店や娯楽施設などの魅力」、「⑬川辺ののどかさ」、「⑤川沿いに大きな看板が掲げられているような街並みの魅力」の順に魅力度が高いことが示された。一方、夜の道頓堀川では、「⑧遊歩道の照明の魅力」、「⑥飲食店や娯楽施設の魅力」、「⑬川辺ののどかさ」の順に魅力度が高い結果となった。

表-2 刺激要素に対する魅力度評価

分類項目	番号	非日常性要因	平均得点	
			昼の部	夜の部
視覚要素	水面	① 水の存在感	-0.303	-0.322
		② やすらぎ	-0.577	-0.270
		③ 倒景	0.097	0.691
	空間構成	④ 開放性	0.183	0.145
		⑤ 猥雑さ(遠景)	0.697	0.711
	人工建造物	⑥ 猥雑さ(近景)	0.920	0.829
		⑦ 都会的おしゃれさ(遠景)	0.606	0.671
		⑧ 都会的おしゃれさ(近景)		0.941
		⑨ 川辺の履歴	0.520	0.757
	植物	⑩ 癒し	-0.137	-0.151
嗅覚要素		⑪ 清涼さ	-0.960	-0.875
触覚要素		⑫ 爽快さ	0.091	-0.039
聴覚要素		⑬ のどかさ	0.903	0.776
その他		⑭ 休憩性	0.280	
		⑮ 高揚感	0.074	0.066

4.2. 全体の満足度への影響構造

道頓堀川において非日常性要因の何が重要であるか、またどのような人が非日常性を強く感じているかを明らかにする目的で重回帰分析を行い、非日常性要因や回答者属性が全体の満足度に及ぼす影響力（標準偏回帰係数）を求めた（図-1～図-3 参照）。各図では、被説明変数である「全体の満足度」に対する説明変数において、その標準偏回帰係数の値に関する有意確率が $p < .1$ を満たすもののみを示している。

図-1 より、昼の道頓堀川では「水の存在感」、「猥雑さ（遠景）」、「猥雑さ（近景）」、「爽快さ」などの非日常性要因が、夜の道頓堀川では「猥雑さ（遠景）」、「水の存在感」、「やすらぎ」、「清涼さ」などの非日常性要因が「全体の満足度」に及ぼす正の影響力が大きいことが示された。また、夜の道頓堀川では、「のどかさ」、「猥雑さ（近景）」などの非日常性要因が「全体の満足度」に及ぼす負の影響力が大きいことが明らかとなった。次に、各回答者属性が全体の満足度に及ぼす影響力を図-2 および図-3 に示した。これらより、昼夜ともに遊歩道に降りたきっかけのうち「川・遊歩道の雰囲気が良くて」が全体の満足度に対して正の影響力が大きいことが示された。さらに、昼では道頓堀周辺に来た目的が「観光」、夜では居住地域が「その他」などの属性が全体の満足度に対して正の影響力が大きいことが明らかとなった。また、負の影響力が大きい属性を見ると、昼では年齢が「20代」、道頓堀川周辺に来る頻度が「ほぼ毎日」など、夜では年齢が「10代」「20代」、道頓堀川周辺に来た目的が「通勤・通学」などという結果となった。回答者の年齢比率（図-4）を見ると、現状では10代20代などの若年層が7割～8割を占めていることから、道頓堀川の今後の整備においては、そのことに留意した整備の方向性を模索する必要性があらうと考えられる。

5. 結論

本研究では、道頓堀川において人々が求める非日常性を明らかにする目的でアンケート調査を行ったが、その結果から、昼夜ともに「①川の水の存在感や水量感に迫力を感じて水辺に来たと実感する」や、「⑤川沿いに大きな看板やビルなどが立ち並ぶにぎやかで猥雑な街並みが魅力的である」などの要因が道頓堀川において人々に心地良いひとときを与える、つまり非日常性をもたらす要因として重要であるということが示さ

れた。さらに昼夜独自の特徴として、昼では「⑥遊歩道の飲食店や娯楽施設などが魅力的である」、夜では「②水面を見てやすらぎを感じる」、「⑩水のにおいに清涼さを感じる」などといった要因もそれぞれ重要であることが明らかとなった。また、川・遊歩道の雰囲気に誘われて遊歩道に降りることや、遠方から観光目的で来訪するなどの属性が道頓堀川に対して非日常性を強く感じる属性であることが明らかとなった。以上の結果から、今後の道頓堀川整備の方向性を検討する上で、これらの非日常性に関する要因がキーワードとなることを示唆しているといえよう。

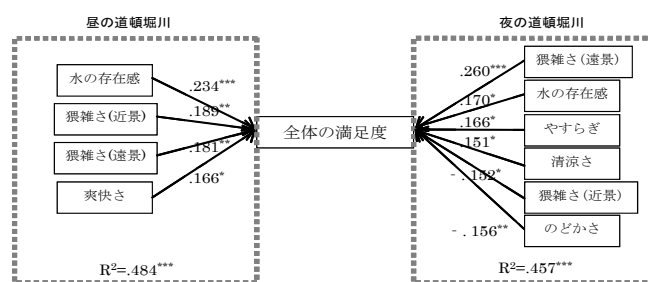
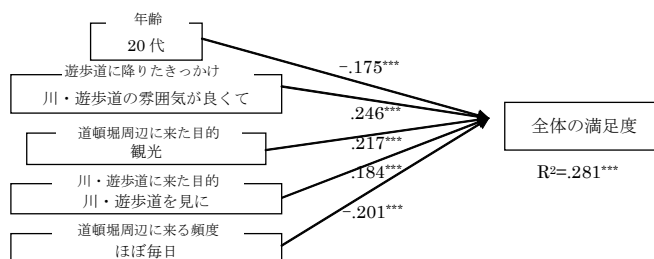
図-1 非日常性要因の影響構造（* $p < .1$ ** $p < .05$ *** $p < .01$ ）

図-2 回答者属性の影響構造（昼の部）

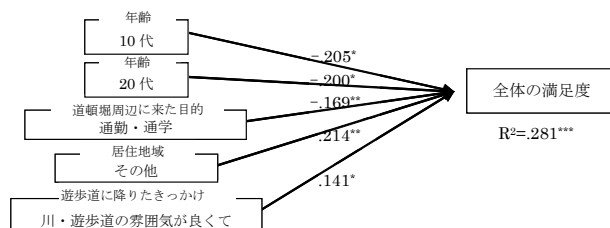


図-3 回答者属性の影響構造（夜の部）

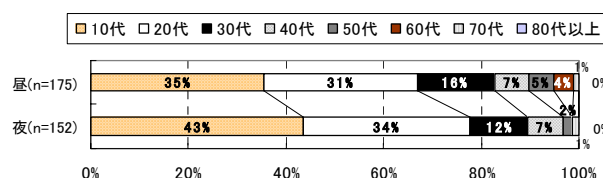


図-4 回答者の年齢比率

-----【参考文献】-----

- 1) 嶋根克己・藤原正之, 「非日常を生み出す文化装置」, 北樹出版, 2001